

## 書評/新刊紹介

土持ゲーリー法一 著

## 『ラーニング・ポートフォリオ～学習改善の秘訣～』

田 宮 憲\*

周知のように、日本におけるFD義務化の流れは、文科省の「大学設置基準」の一部改正にある。そこでは、成績評価基準の明示や教育内容の改善のための組織的研修が義務づけられた。また、本書のテーマであるラーニング・ポートフォリオがクローズアップされたきっかけは、中教審における「単位制度の実質化」にある。このような日本の高等教育機関を取り巻く環境の変化によって、各大学はFDに関する施策を実施すべき状況になったというのが現状であろう。さらに大学全入時代の到来にともなって、大学生の学力低下や教員の従来の指導法への懸念も指摘されるようになり、社会的要請として、大学教育に対して多くの改革・改善が要求されるようになったのである。

さて、このような背景のもと、各大学はFDの推進を大学運営の1つの大きな柱として、導入途上であるが、現段階では、「学生による授業評価」や「公開授業」の推進など、ごく表層的な対応に終始していると言わざるを得ない。確かにそれらの施策の意義も認めるが、現状では、ビジネスにおけるクレーム・ボックス以上の効果を期待できないものも多いと考えられる。つまり、FDを非常に狭義に捉えている証であり、学生の能力向上や教職員の職能開発に十分に資するとは考えられないからである。大学運営の根幹は、その主役である学生が「能動的な学習スタイル」を確立できる施策を最重要の目標とすべきであろう。

では、その指針となるべきものは何か。それを適切に、しかもわかり易く提示したのが、著者の『ラーニング・ポートフォリオ～学習改善の秘訣～』と前著『ティーチング・ポートフォリオ～授業改善の秘訣～』である。両書が非常に説得力を持っているのは、著者が世界のFD動向を熟知されていること、教育現場において学生を主役に据えた授業を実践されていること、さらに高等教育機関の制度設計も含めファカルティ・デベロッパーとしてご活躍されていることにある。

## 序章

## 第1章 FD義務化

## 第2章 FDの世界的動向

## 第3章 ティーチング・ドシエ（ポートフォリオ）の役割

## 第4章 エデュケーショナル・デベロップメント

国際コンソーシアム (ICED)

## 第5章 日本におけるティーチング・ポートフォリオ

## 第6章 リベラルアーツ・カレッジ

## 第7章 授業を「創る」

## 第8章 ラーニング・ポートフォリオ

## 終章



\* 関西外国語大学国際言語学部 講師  
Kansai Gaidai University

ところで、書名である『ラーニング・ポートフォリオ』とは何か。著者は、この点についても非常にわかり易く解説している。本書の帯にあるように「学習とは単なる記憶ではない。そこには学生が学習に向け能動的に取り組んでいく精神の働きがなければならない。この精神の働きの軌跡を、教員の支援の下、学生自ら具体的に記録したものがラーニング・ポートフォリオである」と述べている。

「ポートフォリオ」という言葉は、日本語としてまだ十分にこなれていない表現ではあるが、経済用語では、「保有資産の一覧表」であり、芸術の分野では、芸術家の「選集」を意味する言葉でもある。また一般的には、「書類入れ」というような意味にも用いられている。誤解を恐れずに言えば、ラーニング・ポートフォリオとは、学生が学習の達成度やその過程を記録した学習成果の一覧表と言える。それを作成し、教員の支援の下、省察的検討を加えることによって、学習がさらに発展・向上するという性格を持つものである。では、具体的にどのように実践すればよいのだろうか。そのヒントや運用上の注意がラーニング・ポートフォリオの現場での豊富な具体的導入例とともに、第7章と第8章で詳しく説明されているので、是非参考にさせていただきたい。このように本書で述べられている「学生が能動的に行う学習に対する省察的記録の作成」と前著『ティーチング・ポートフォリオ』で著書が明らかにした「教員の効果的な授業設計」とを組み合わせることによって、充実した高等教育の現場が創出されると期待できる。

ただし、それを可能とする学内の環境整備をどのように行うのか、という大きな課題に直面することになる。率直に言えば、週に8コマ以上も授業を抱える教員にラーニング・ポートフォリオへの十分なフィードバックを期待できないし、1年に40単位近く登録する学生が、その授業1つ1つに密度の濃いラーニング・ポートフォリオを作成できるとも思えない。つまり、最大の教育効果を引き出すためのあらゆる施策が、現行単位制度あるいはカリキュラムの変更や図書館・コンピュートールーム等の学習支援施設の利用の促進など学校運営全体の発展をその基礎条件として要求するからである。この点についても、高等教育機関の設計、海外の動向の熟知、教育改善・学習改善に関する実践者である著者の今後の活動・著作に期待している。

また著者が本書で語るのは、学生への教育効果を最大限に引き出すためのラーニング・ポートフォリオの活用だけではない。特筆すべきことは、著者が長年研究に取り組んできた「教養教育」の重要性を示唆する視点が本書全体に通低音のように響いていることである。これは教養的人材の育成とその知性の社会的還元こそ、教育の本質であると著者が考えるためである。そのため、対話を中心に据えたワークショップやチュートリアルなどの教育方法が重視されるのである。そのような意識が、喫緊の課題である高等教育機関における「初年次教育」の充実にも確実に結びつくであろう。

最後に、章立てからもわかるように本書はラーニング・ポートフォリオの解説をはるかに超えた内容を含んでいる。学生の能力向上への単なる手引書ではなく、高等教育に携わる教職員が多面的な問題に気づき、自らの職能の省察的検討を行い、能動的な行動に導く指針書でもある。本書のように教育改善、学習改善について、包括的に、しかもわかり易く論じた類書はないと言ってもいいだろう。前著『ティーチング・ポートフォリオ』とともに教育現場で多くの悩みを抱える教職員の必読書であり、本書の内容が日本の高等教育機関の発展を考えるための基本知識として、広く共有されることを期待する。

〔東信堂 本体2,500円〕